岸俊男先生のご逝去を悼む

真柄甚松

福井県史編さん委員会委員、原始・古代史部会長の岸俊男先生が昭和六十二年一月二十一日六六才を一期として逝去された。

ここに、岸先生が一〇年余にわたって福井県史に賜わった多大のご教示に感謝し、謹んでご冥福をお祈りする次第である。

昭和五十九年春岸先生は京都大学を停年退官されたが、その時京都大学国史研究室の後輩・受業生によって発刊された「岸俊男教授年譜・著作目録」によると二七四に及ぶ著書・論文が記され、先生の永年にわたる旺盛な研究活動と研究に対する真摯なお姿を想像できるのである。この論文の中には福井県をフィールドとされたものがかなり含まれ、福井県の古代についてご造詣が深かった。また、先生のご尊父熊吉氏は福井市の出身であり、先生ご自身も時折福井市を訪ねられ福井県とは

ご縁の深い方であった。この様な理由もあって昭和五十三年ご繁多の先生ではあったが県の要請に応えられ原始・古代史部会長をお引受けいただいたのである。

部会員からすれば、大学者岸先生から直接手解きをうけるという夢のような話が現実となったのである。先生は県史を編むには内容史料的・人的・物的諸要素があり通史を見通した緻密な計画のもとになされなければならないと言われ、年々急速に進捗する圃場整備事業を目の当りにご覧になり糞置の庄をはじめ多くの初期荘園や条里遺構といった土地に刻まれた古代が消滅していくことに心を痛められ、一刻も早く条里復原作業に着手すべきことを力説されたのである。先生の情熱は行政をも動かし条里復原作業は古代史部会の範疇に加えられることとなった。こうして資料編1古代の作業と並行して丸岡・今立・武生・敦賀・小浜・福井・大野で合宿調査となったのである。寝食を共にする合宿は作業の効率のみならず学問のあり方を教わり先生の人柄を知る好機となった。先生は部会員の愚問にも億劫がられることなく、懇切丁寧に教授くだされ、愚見に耳を傾けていただいた。ある夏の福井市の調査を終えた夕、福井夏まつりで賑っている中央公園で岸先生に氷水をご馳走になって感激したことがあるが、先生の人間性にふれた思いがした。

先生は史料を大切に慎重に取扱われ、その本質に迫る実証主義を貫かれ軽々に結論を出されることはなかった。武生の高森遺跡を見学した時偶然にも遺跡の取材に来ていた報道陣に囲まれ、遺跡の性格について執拗にコメントを求められたが、先生はそのことについて一言も応ぜられなかった。

先生は京都大学を退官されてから愛知学院大学文学部教授として週三日、奈良県立橿原考古学研究所長として週二日、その合間に九州・東京・東北へと講演に出かけられ先生の手帳には空白がなく正に東奔西走のご活躍であった。それに加え藤ノ木古墳の発見、大津皇子の文字から日本書紀の原本に関わる大量の木簡の発見などで仕事が増え、月月火水木金金の休日なしの生活であった。お逢いする度に忙しくて福井県史に時間が割けず申し訳ないと陳謝されるのであった。

先生は昭和六十一年四月黄疸により精密検査のため奈良医科大付属病院に入院された。六月十二日先生を見舞ったが、三月中旬に福井へ来ていただいた時のお元気なお姿とは打って変って病床に臥っておられる痛々しいお姿に接し先生のお顔が二重に見えた。細い声で遠路の見舞と入稿作業の遅れを詫びられるのであった。

先生のお許を得て資料編（古代）を入稿したのは九月下旬であった。先生は初校で目を通したいと言われたので、ご無理をなさらずにと添書きしてゲラをお送りしたのである。十二月十一日消印の先生からの封書が届いた。そこには、柱と表題について先生の意見が記されていた。末文には「右とりあえず一筆御連絡まで」とあり、更に指導いただける文面ではあったが、先生から頂戴した最後のご教示となった。後日聞くところによると十月に吐血され先生ご自身容易ならざる病であると悟られたのであろう。苦しい中から最後のご教示を賜ったかと思うと先生の責任感の強さが感じられ悲しみが倍加するのである。

葬儀の式場に置かれた全紙大の写真の先生は牧野県史に劣らない福井県史を編纂して下

さいよと要求しておられるようであった。私共はこれまで先生から教わった数々を十分に活かし、先生の霊前にその成果を手向けられるよう努力することをお誓い申し上げたい。

日本のみならず世界の大学者で、人間味豊かな大教育者であられた岸俊男先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げる。